被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード 縁 えにし

教訓が、いのちを救う。
3.11 DENSHO ROAD

2025 vol.15

津波の脅威から地域住民を守る
いわき市地域防災交流センター 久之浜・大久ふれあい館

「石巻ニューゼ」館長の平井さん
福島県立相馬高等学校 出版局
伝承ロードをゆく 第4回 宮城県亘理郡亘理町・岩沼市
陸前高田市・海岸山 普門寺
震災と原発事故の教訓生かす 福島県広野町
いいたて村の道の駅までい館
浜の産直 きらうみ



津波記憶石第29号（八戸市）

発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構



津波の脅威から地域住民を守る

いわき市地域防災交流センター 久之浜・大久ふれあい館

東日本大震災による津波と大規模火災により、甚大な被害が生じた久之浜・大久地区の防災力向上を目的に2016年3月にオープンした「いわき市地域防災交流センター久之浜・大久ふれあい館」。津波避難ビルとしての役割を担うほか、館内の防災まちづくり資料室では震災当時の様子を写真パネルや映像で紹介。震災の経験と教訓を次世代につないでいます。

地区の防災拠点であり、支所・公民館の役目も担う「久之浜・大久ふれあい館」

同館がある久之浜地区の沿岸部は、震災以前は海岸近くまで住宅が密集し、漁業の町として栄えていました。しかし最大高およそ7㍍の津波と直後に発生した大規模な火災により地域の大部分が消滅。久之浜・大久地区を合わせて69人の方が亡くなりました。

震災後、市は海岸防潮堤をかさ上げし、背後に防災緑地公園を整備。津波が来た際に住民が緊急避難・退避できる「津波避難ビル」（高台までの避難に十分な時間が確保できない場合の緊急避難場所）として同館が建設されました。

1階には市役所支所や公民館、講堂、2・3階には「防災まちづくり資料室」や防災倉庫、研修室、調理室などが設けられています。普段は行政サービスの提供や地域住民の活動の場所として利用されていますが、災害時には海側300㍍の範囲の住民の避難所となり、約260人分の3日分の水や食料、携帯トイレなどを備蓄。また、同館が閉まっている時間帯に津波が発生した場合に備え、1階の外側2カ所に蹴破り戸を設置しています。

当時の避難所を再現

同館2階の「久之浜・大久防災まちづくり資料室」は、震災の経験と教訓を後世に伝え、防災意識の向上を図ることを目的に開設しました。

久之浜・大久地区の発災直後の様子を写真パネルや映像で紹介するコーナーでは、津波に押し流されたがれきの山や、真っ赤な炎に包まれた建物など、当時の状況を生々しく伝えています。

震災時の避難所を実際に再現したコーナーもあり、床に毛布を1枚敷いただけの狭い場所に生活用品が無造作に置かれています。プライバシーが保たれない空間で毎日を過ごした住民の不安な気持ちが感じ取れるとともに、災害に対する日頃の備えについても考えさせられます。

資料室の開館は、午前8時30分～午後5時。入館無料。休館は毎週日曜と年末年始。久之浜地区の沿岸部を巡り、語り部が震災当時の様子について講話するガイドツアーも行っています。問い合わせは「いわき震災伝承みらい館」＝TEL0246(38)4894＝まで



所在地／福島県いわき市久之浜町久之浜字中町32
TEL0246-82-2165

震災体験 次世代に語り伝える

いわき語り部の会の阿部さん



阿部さんが参与を務める「久之浜・大久地域づくり協議会」が中心となり、地区の堤防沿いに震災の犠牲者と同じ 69本のサクラの木を2023年に植樹しました

「津波が来たらすぐ逃げるに越したことはありません。ほんの数秒の差が生死を分ける境目になるのです」そう話すのはいわき語り部の会のメンバーで、いわき市久之浜に住む阿部忠直さんです。

阿部さんは自宅から車で30分ほどの場所で趣味のテニスをしている時に揺れに襲われました。地震が収まり急いで戻ると、妻・ヒサエさんが近所の高齢女性を車に乗せようとしているところでした。

「服を着替えてから手伝おうといったん家に入ろうとしたところ、大きな消防のサイレンが聞こえました。川の方を見るとすぐそこまで真っ黒な水が迫ってくるのが見え、無我夢中で家を飛び出しました」

津波を免れた阿部さんでしたが、夕方になってもヒサエさんと会うことができません。自宅がある方角からは真っ赤な炎が見えたため、危険を覚悟の上で探しに行くことにしました。

「がれきが散乱した道を歩いていると倒壊を免れた建物の2階にいる妻を見つけました。車ごと津波に巻き込まれ死を覚悟したと言いますが、途中でブロック塀に引っかかり流されずにすみました。命が助かったのは奇跡です」と振り返ります。



「久之浜・大久ふれあい館」2階にある「久之浜・大久防災まちづくり資料室」には避難所のレプリカなどが展示されています

久之浜地区は原発事故によりいわき市内で唯一自主避難が要請されたため、阿部さん夫婦はおよそ2カ月間の避難生活を経験。その後、震災前に自宅があった場所から500メートルほど離れた高台に家を再建しました。

教訓刻む伝承の碑

震災翌年に設立された「いわき語り部の会」の一員として活動する阿部さんは、「久之浜・大久ふれあい館」や沿岸部などをめぐるガイドツアーの案内役を務め、自らの震災体験を伝えています。

「最近は県外の小・中学校からの依頼が増えています。真剣に話を聞いてくれる子もいれば上の空の子もいますが、来てくれるだけでうれしいですね」と話します。

震災伝承施設第1分類に登録されている「久之浜・大久地区東日本大震災追悼伝承之碑」は、海のすぐそばにありながら津波に耐えた稲荷神社の敷地に2018年に建立されました。碑には「大地震が起きたら大津波が来る」「直ぐ逃げろ、高台へ。一度逃げたら絶対戻るな」と赤い文字で刻まれています。



「久之浜・大久地区東日本大震災追悼伝承之碑」を見つめる阿部さん。中央に津波の教訓が刻まれた伝承の碑が建ち、向かって右側に被害状況や復興の歩みを記録した碑文、左側には遺族の了承を得た66人の名前が刻まれた芳名板があります

「子どもたちには必ずこの教訓を声に出して読んでもらうことにしています」と阿部さん。碑の横には久之浜・大久地区で震災の犠牲になった人の芳名板があり、その中には阿部さんが親しくしていた近所の人たちの名前もあります。

「いざ災害が起きたとき、自分はどのように行動すべきか頭の中にイメージしておいてほしい」と訴えます。

震災から14年が経ち、現在の「いわき語り部の会」のメンバーは70代が中心。伝承活動の存続にも危機感を抱いています。「写真や記録だけでは本当の悲惨さを伝えることは難しいと思っています。震災を経験した者の責任として、できる限り語り部の活動を続けていきたいですね」と阿部さんは前を向きます。

思いを《発信》

新聞社ならではの視点で伝承

「石巻ニューゼ」館長の平井さん

東日本大震災最大の被災地、宮城県石巻市に本社を構える石巻日日新聞社は、被害状況を伝える施設「石巻ニューゼ」を運営。世界から関心を集めた「手書きの壁新聞」や記者が撮影した写真を展示しています。館長の平井美智子さんは記者として現場で見聞きした当時の様子や被災者の声を、来館者に伝えています。



館長の平井さんは講話も担当しています。講話を希望の場合は約1時間大人1100円、学生以下550円

大正元年創業の石巻日日新聞社は、宮城県石巻市、東松島市、女川町をエリアにする夕刊紙「石巻日日新聞」を発行しています。石巻ニューゼは石巻日日新聞が創刊100周年を迎えた2012年11月に石巻市中央に開館しました。

平井さんは「震災から1年半以上経っても石巻での復旧作業は序盤でしたが、すでに風化が始まっていると感じました。周りに伝承施設はまだなく、地元の新聞社として震災を語り継ぐ場をつくることにしました」と説明します。ニューゼは「NEWSèe」とも表記し、「ニュース」と、フランス語の「ミュゼ」を組み合わせた造語。「ニュース博物館」を意味します。

輪転機浸水し、手書き

震災時、報道部の記者だった平井さんは会社で被災。毎週金曜午後3時から部内ミーティングで、金曜だった3月11日は多くの記者がいました。

揺れが収まると、それぞれ市役所や警察署で取材。平井さんは太平洋や市街地を見渡せる日和山へ。避難者は続々と増え、雪が降り出し、大津波が住宅街に押し寄せました。雪で視界不良の中、平井さんは無我夢中でカメラのシャッターを切りました。水が引いた夜に市役所に到着。情報が錯綜し、現場は混乱状態にありました。

会社も被災し、1階の輪転機の一部が浸水。新聞を印刷できず、手書きで壁新聞を作成することに。平井さんは「確かな情報が求められている時に、通常の新聞を出せないなんて」と悔しさを打ち明けます。

壁新聞は震災の翌12日から6日間、市内の避難所に貼りました。日に日に明らかになる被害の大きさ。増え続ける死者や行方不明者。「まさか、地域新聞に『壊滅』の言葉を使う日が来るとは」と沈痛な表情で振り返ります。だからこそ、「ボランティアセンターの設置」「炊き出し開始」など前向きな話題も盛り込みました。

17日には最後の壁新聞とともに、電気が通った社員宅の家庭用プリンターで印刷したA4サイズの新聞も配布。19日に輪転機での印刷を再開し、減ページ、部数限定で発行にこぎつけました。

震災から13年が経った24年11月、石巻ニューゼは本社2階に移転。壁新聞や記者が撮影した写真、震災関連の資料を展示しています。

希望に応じて講話を行う平井さんは「情報は信頼が大事だと痛感しました。発信の仕方を一歩間違えれば、災害時に限らず、命に関わる場合もあります。情報の在り方も展示を通してお伝えできれば」と語ります。



所在地／石巻市双葉町8-17 石巻日日新聞社2階
TEL0225-95-5231


手書きの壁新聞が並びます。見学は無料。10:00～16:00開館。日曜、祝日休みで、臨時休館日もあります

新聞づくりで震災と向き合う

福島県立相馬高等学校 出版局



高校生の視点を大切にした学校新聞の制作に励む左から渡部さん、伊藤さんと顧問の志賀先生

福島県立相馬高等学校（伊藤靖隆校長）の出版局は東日本大震災以来、相馬の〝今〟を学校新聞で発信し続けてきました。震災時は乳幼児だった現在の高校生には、全く記憶がない生徒もいます。部員らは紙面を通じ、自分たちの世代も震災と向き合う大切さを発信し、途切れることのない震災伝承を目指しています。

同校では出版局の生徒が通常の新聞と同じ大きさの「相馬高新聞」を年1回の他、速報紙も随時発行しています。震災直後の休校中、当時の部員たちは被災地を取材で駆け回り、静かな校舎で黙々と相馬高新聞の紙面を制作。学校が再開した日、全生徒に新聞を配布しました。この取り組みは2012年の全国高校新聞コンクールで最高賞の文部科学大臣奨励賞に輝きました。

現在の部員たちも、高校生が震災から復旧・復興を通じて垣間見える相馬の今と未来を考えるきっかけとなるような紙面作りに力を入れています。これまでにも22年3月の福島県沖地震で被災家屋の屋根などを覆ったブルーシートを活用した小物作りに取り組む団体と、相馬総合高校との商品開発を記事で紹介しました。「取材では分かりやすく教えていただき、すごく参考になります」と部長で3年の渡部（わたなべ）由和理（ゆかり）さん。副部長で3年の伊藤心優（まひろ）さんは「普段の高校生活では体験できない貴重なお話を伺えます」と語ります。

新聞には論説欄もあります。今年3月の卒業式で配った新聞の論説テーマは「災害記憶消失世代、震災を知る」で渡部さんが執筆。自分たちの世代が震災の記憶の狭間にいることを挙げつつ、教訓を次世代につなげるために自分たちのできることを考えていこうという内容でした。

取材や紙面制作のポイントについて、渡部さんは「やり直しの利かない写真撮影を大切にしています」、伊藤さんは「取材相手の伝えたいことを、読み手にきちんと届ける取材と執筆を心がけています」と言います。2人は断片的ながらも震災時の記憶が残る最後の世代。紙面が他の生徒たちにとっても、高校生の視点で震災や災害を見つめる貴重な機会となっています。

顧問の志賀早耶香先生は「『記憶を記録し継承する』という言葉を大切にし、相馬の高校生が作る新聞ということを意識して活動しています。今後は継承の必要性がより高まるので、こうした点でも情報を発信していければ」と話しています。



校外に出向いて取材活動

3・11伝承ロード推進機構
震災伝承施設紀行

伝承ロードをゆく

第4回 宮城県亘理郡亘理町・岩沼市

取材／一般財団法人3・11伝承ロード推進機構　石森　智佳

青森、岩手、宮城、福島の4県でツーリズムや、映像アーカイブなどの活動を行っている3・11伝承ロード推進機構の職員が「震災伝承施設」を直接取材。「3・11伝承ロード」の意義と役割を改めて考えながら、東日本大震災の教訓と災害への備えを学びます。







❶「悠里館」は城郭風のデザインが印象的　❷東日本大震災特集コーナー　❸亘理町立郷土資料館窓口で、町が町内の小中学生らと制作した「郷土かるた」を販売。「わ」の読み札で「忘れるな 津波が来たら 高台へ」の教訓を伝えています

駅隣接の伝承施設

JR常磐線亘理駅東側に隣接する「悠里館」は、2階に図書館を備えた複合施設。駅の待ち合い、休憩スペースとしても多くの町民や観光客らが立ち寄る1階に、震災伝承施設（第2分類）「亘理町立郷土資料館」があります。

「東日本大震災特集コーナー」に25枚の写真を使ったパネルを設置して地震と津波による同町荒浜地区、吉田地区などの被害、捜索や避難、支援、復旧・復興の様子を紹介。年1回、発災日の3月11日の上映会のほかグループ客からの申し出があれば震災10年の節目に制作された映像作品「わたり復興のあゆみ」も上映しています。

学芸員の森田健太郎さんによると当時の被害の写真や映像を見た方からは「想像以上だった」「復興の様子を改めて知ることができた」といった声が寄せられているそう。

「東日本大震災は、2025年2月に町制施行70周年を迎えた亘理町の歴史の中でも大きな出来事ですが、大津波の被災は震災が初めてではありませんでした。例えば江戸時代の慶長三陸地震の津波でも被害があったことが記録や調査で確認されています。大きな地震の際には津波が起きることがある、といった解説も展示しています」と森田さん。

25年10月11日から11月30日まで同館で開催される展覧会「町制施行70周年記念写真展」にも、東日本大震災と復興に関する新展示を盛り込む予定です。

地区の記憶を未来へ

東日本大震災で甚大な津波被害を受け、全戸が玉浦西地区などへの集団移転を余儀なくされた岩沼市二野倉地区。「いわぬまひつじ村」は、その跡地に誕生した震災伝承施設（第2分類）です。

運営する「青年海外協力協会」は、発展途上国などで活躍



亘理町立郷土資料館の常設展示室で上映している「わたしたちのまち亘理」でも震災の被害や教訓を映像で紹介。映像に登場する「鳥の海公園　鎮魂の碑」は第2分類に登録されています

「震災伝承施設」とは？

東日本大震災の事実や記憶、経験を伝承する「3.11伝承ロード」を構成する施設で①震災の教訓が理解できるもの、②震災時の防災に貢献できるもの、③震災の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの、④災害における歴史的・学術的価値があるもの、⑤その他、のいずれか1つ以上に該当することが条件。①～⑤1つ以上の条件を満たす施設を「第1分類」、加えて公共交通機関等の利便性が高かったり、近隣に駐車場があったりと、来訪者が訪問しやすい環境にある施設を「第2分類」、さらに案内員が配置されていたり、語り部活動が行われたりといった来訪者の理解しやすさに配慮している施設を「第3分類」としています。



1 亘理町立郷土資料館
宮城県亘理郡亘理町字西郷140
問／郷土資料館
TEL0223-34-8701

2 鳥の海公園　鎮魂の碑
宮城県亘理郡亘理町荒浜字隈崎9-2
問／荒浜まちづくり協議会
TEL0223-36-8189

3 いわぬまひつじ村
宮城県岩沼市押分字須加原61
問／公益社団法人
青年海外協力協会
TEL080-4105-5538

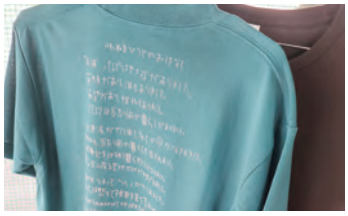




牧場内には、かつての集落の区画や流れてきた庭石や漁具、大木の切り株など地区に暮らしがあった痕跡をできる限り残す工夫をしています



震災からいわぬまひつじ村誕生までの経緯を紹介する手作りの展示。「何をするにも相談し教えてもらいながら住民代表の方々と二人三脚で進めてきました」と松尾さん





土産として販売するオリジナルグッズにも二野倉地区の過去と現在を「紡ぐ」メッセージが込められています



「私たちの理念は「紡ぐ」。羊の毛は1本だけではすぐにプツンと切れる弱いものですが、束にして紡ぐことで強く切れにくい糸を作ることができる。「人と人」「人と資源」、そして震災前にこの二野倉には人が住んでいて、皆と同じ日常があったという「過去の記憶と未来」を「紡ぐ」ことを大切にしていきたい」と話す松尾洋子さん（写真左）と大上萌花さん

するボランティア「青年海外協力隊」から戻ったOB、OGを中心とする組織。「活動が始まった15年冬当時、二野倉地区は電気も水道もない、人も通らない場所。お金も全くないところからのスタートでしたが『ゼロから始めることに躊躇のない』メンバーだったからこそ、ここまでやってくることができました」と教えてくれたのは、松尾洋子さんと大上萌花さん。

開設のきっかけとなったのは、東北大学の研究室による羊を使った除草実験でした。11年から岩沼市と提携し取り組んでいた仮設住宅の高齢者らの見守り支援を通じ、住民から「自分たちの住んでいた地区が寂しい場所になっていく」と悲しむ声を聞いていた二野倉地区を実験の場に選出。15年11月に雑草の繁茂していた地区内に2頭の羊を放牧しました。

人の丈ほどもあった雑草をきれいに食べてくれた羊たちの存在を知った住民たちが野菜や雑草を持って地区を訪ねてくるように。岩沼市と青年海外協力協会が協定を結び、住民が憩えるような牧場を整備することになりました。「木柵作り」「石拾い」「瓦礫（がれき）拾い」といった住民参加型の定期イベントとして牧場づくりがスタートしたのが16年5月。松尾さんは「業者に依頼するのではなく『皆で手作り』することで皆が『自分たちの牧場』だと思えるような場にしたいと考えました」と振り返ります。

やがて農園やドッグランが完成。2頭だけだった羊たちは41頭にまで増え、えさやりなどの触れ合い、羊毛を使ったワークショップなどの体験が楽しめる牧場として市外からもレジャー客が訪れるようになりました。毎週土・日曜、祝日に「羊のレース」や縁日、ふれあい体験、不定期で季節の収穫体験も行われています。

「ひつじ村に来てくれるのは、主に未就学児から小学校低学年の子どものいる家族連れ。震災を知らない世代に、この場所にかつて普通の暮らしがあったことをどう伝えていくか模索しています」と松尾さん。方法の1つとしてこのほど着手したのが、市内の被災者らの声を録音し、二次元コードで読み取って再生する「カプセルトイ」を利用した独自の伝承プロジェクトです。現在、体験を語ってくれる市民を募集しています。

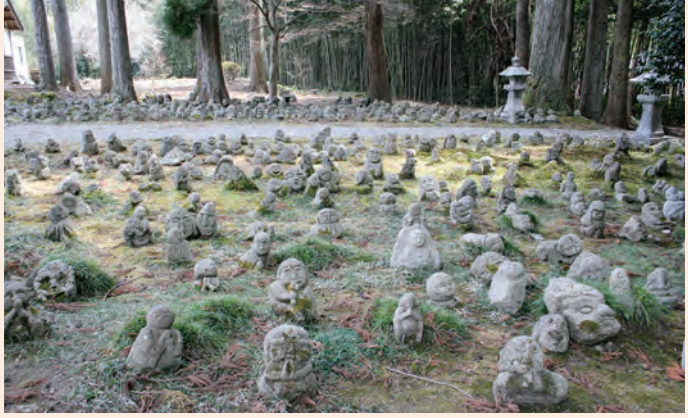
松尾さんは「さまざまな立場の方々の経験を残していきたい。例えば当時小学生だった人の経験を聞けば、子どもたちにも『学校で被災するというのは、こういうことか』と〝自分ごと〟として受け止めて、いざというときに思い出してもらえるかもしれません。公務員や外国人など、さまざまな立場の方々に語りの協力をお願いしていきたいと思っています」と言い「〝伝えていく〟ためにも〝人に来てもらう〟ことが第一」と強調します。

「震災伝承施設」というと厳粛な場をイメージしますが、いわぬまひつじ村のようなにぎやかな場所で大人も子どもも幅広い世代が楽しみながら教訓を学べるアイデアに大きな可能性を感じました。

供養通じて心の復興願う

陸前高田市・海岸山 普門寺

緩やかな勾配の参道を登り詰めると、うっそうとした木立の下に五百羅漢がずらりと並んでいます。東日本大震災で津波の犠牲となった亡き人を思う人たちが一体ずつ、丹精込めて作り上げました。石像の表情はさまざまですが、その多くは笑顔なのが印象的。悲しみの先にある、未来を託した光景が広がっています。



制作者の祈りがこもった五百羅漢

2026年に開山520年を迎える曹洞宗の「海岸山 普門寺」は陸前高田市の古刹です。山間にあり、東日本大震災では津波の難を逃れ、後に復旧活動の拠点や慰霊の場としての役割を果たしてきました。

普門寺30世住職の熊谷光洋さんは「震災後の3月20日から3カ月間、福井県からのボランティア団体の宿泊先として受け入れました。久々に聞く人のざわめき、夜にはボランティアが自家発電した明かりがともる。人の存在は力強いと実感しました」と振り返ります。

普門寺では身元不明の遺骨を預かり、一時は400柱近くを安置しました。百か日法要を行った熊谷さんは「四十九日の頃は供養どころではなかった。まだ行方不明というだけで、家族はどこかで生きていると信じていました。そういう意味では百か日が一つの区切りになったかと思います」。身元不明遺骨も震災後2年ほどで最後に14柱が残り、寺の後ろに建立された「東日本大震災犠牲者慰霊碑」で眠っています。



住職の熊谷光洋さん

宗派超えて慰霊活動

普門寺には宗派を超えて多くの宗教関係者が訪れ、慰霊や法要などを共に活動しました。震災後に知り合った大学時代の友人の檀信徒の芸術家との交流をきっかけに、有志らによる震災犠牲者の供養を込めた「五百羅漢」の制作が2013年にスタート。毎年8月に制作会を開き5年をかけて569体が完成しました。

本堂には全国各地から寄せられた仏像がずらりと並び、最終的に1300体を数えました。熊谷さんは「五百羅漢と仏像の数を足すと陸前高田市の犠牲者の数とほぼ同じになる」と語ります。震災で被害に遭った着物の〝供養〟として地元の商工会女性部が中心となり、古い着物の生地で作ったつるし飾り「二度と散らないねがい桜」（震災伝承施設第2分類）も7年がかりで作られ、19年4月に奉納されました。

つるし飾りは震災での全国の犠牲者の数と同じ（制作時）1万8430個で、散ることのない布地の桜の一つ一つに制作者の祈りの言葉を記した紙が入れられています。高さ4・5メートルで、まるで本物の桜の木のよう。現在は記録が更新されてしまいましたが、奉納時にはつるし飾り数がギネス世界記録に認定されました。

震災から14年を経て「人と人とのつながりはとても重要。感謝する気持ちがさまざまな人や物事につながっていく」と熊谷さん。「生きている人が震災後どう生きてきたのか、どう活躍したのかを伝えていくことも大切だ。助けてもらった恩を他の人に返す。助けてくれたことへの感謝の気持ちが次の行動につながると思います」と強調します。



本堂に飾られた「二度と散らないねがい桜」



所在地／岩手県陸前高田市米崎町字地竹沢181
TEL0192-55-2034

命を守る防災体制の確立へ

震災と原発事故の教訓生かす 福島県広野町

広野町は福島第1原発事故の影響で、全町民が避難を余儀なくされましたが、2011年9月30日に広野町全域を対象とした緊急時避難準備区域が解除され、現在では町民の帰還率が9割を超えます。就任13年目の遠藤智町長は、震災と原発事故の経験を教訓に、新たな時代の防災に強い〝安全・安心な共生のまちづくり〟に向けた歩みを進めています。



お話を伺った方
遠藤智町長



開発・整備が進められているJR常磐線広野駅東側地区

広野町は震災で震度6弱を観測。推定10メートルの津波が襲来し、沿岸部に甚大な被害を及ぼしました。人的被害は津波による死者2人、関連死46人、行方不明者数1人。建物被害は全壊113戸、大規模半壊39戸に上ります（2025年4月現在）。さらに福島第1原発事故による全町避難で、町民およそ5500人が県内外へ避難を余儀なくされました。

当時、遠藤町長は同町議会議員を務める傍ら、発電設備のメンテナンスや工事を行う会社に勤務。福島第2原子力発電所内の事務所で管理・運営に携わっていました。

「震災後は、放射線量が高く外部に持ち出せないゴミを井戸水で洗う作業なども行いました。本来の機能を失った静かな発電所で、防護服を着用し黙々と作業を行う中で悲しみと悔しさが込み上げてきました」と振り返ります。

2011年9月30日、国は広野町全域を対象とした緊急時避難準備区域を解除。これを受けて町は町内の除染作業やインフラの復旧に着手し、翌年3月1日には役場機能を町へ戻しました。

「防災の駅」を整備

2013年11月の町長選で初当選した遠藤町長は、町民が納得して帰還することができる「幸せな帰町」を掲げ、除染による環境の回復、放射線による健康不安の払しょく、商業施設や医療・福祉環境の整備、広野こども園やふたば未来学園中高一貫校をはじめとする教育環境の充実、さまざまな分野の関係機関との包括協定などを捉え、町民の生活を守る取り組みに奔走してきました。

「震災から14年が経過し、住民の帰還率は現在では9割を超えます。しかし人口減少や高齢化といった課題は依然としてあり、今後は持続可能な地域づくりの取り組みが求められています」と話します。

震災後、町は復興計画の拠点として定めた広野駅東側エリアに、広野みらいオフィスビルやビジネスホテルなどを整備。さらに移住定住の受け皿として「広野駅東ニュータウン」を造成しました。本年度は航空宇宙関連企業や医療機関などが新たに進出する予定で、再生可能エネルギー事業や先端技術の分野で新たな産業が生まれつつあります。



サッカーナショナルトレーニングセンター「Jヴィレッジ」の天然芝には、原発作業員のための寮が建設された

また、非常時に命を守る防災体制の確立に向け、町内の公共施設などに太陽光発電と蓄電設備を配置。自営線でつないで電力を融通するシステムを構築したほか、町内の折木地区、広野町役場、二ツ沼総合公園の3カ所に防災備蓄倉庫や貯水槽、再エネ設備などを備えた「防災の駅」の整備計画も進められています。「震災と原発事故の経験を教訓に、新たな時代の防災に強い〝安全・安心な共生のまちづくり〟を推し進めたい」と強調します。

町では23年に緊急時避難準備区域が解除された9月30日を、「広野町復興創生の日」に制定しました。「震災から15年目を迎えますが、復興創生にはさまざまな課題が残されています。これまで国内外からいただいた多くのご縁を大切に、今後も広域的な地域連携を図りながら、一歩一歩着実に歩みを進めていきます」と遠藤町長は力を込めます。

全村避難からの復興 品数や集客 着実アップ

いいたて村の道の駅までい館

東日本大震災による福島第一原発事故の影響で一時、全村避難となった福島県飯舘村の復興と再生の拠点として整備されたのが「いいたて村の道の駅までい館」。村の過疎化や限界集落化も懸念される中、福島市と南相馬市を結ぶ県道のほぼ中間に位置する地の利を生かし、地場産品はもちろん季節限定商品の販売やさまざまな企画を打ち出すなどして、集客力アップに努めています。


大きな吹き抜けのガラス張りが特徴のまでい館

東北の方言で「丁寧」を意味する「までい」を名称にし、2017年8月のオープンから間もなく8周年を迎えます。原発事故の帰還困難区域を除き、同年3月末の避難指示解除後に戻ってきた村民の生活を支え、基幹産業の農業の復興を図る施設として整備されました。第3セクターの「株式会社までいガーデンビレッジいいたて」が管理・運営を担っています。

施設は平屋建てでホールや直売所、コンビニエンスストアに加え、24時間利用可能の待合スペースとトイレなどがあります。飯舘村は元々花き栽培も盛んで、ホールの上にはポットに入ったさまざまな花がつるされ、スポットライトを浴びています。その上はガラス張りの大きな吹き抜けで、夜間もスポットライトが点灯。その明かりがガラス張りから外に漏れ、闇夜を優しく照らし安心感を与えています。


色彩豊かな花々がつるされたホール

駅長兼総支配人の高橋政彦さんは村役場職員でもあり、震災後の各種対応に当たりました。「当村は11年4月に計画的避難区域に指定され、そこからの全村避難のため、村民の動向を把握しやすく支援も早く行うことができました」と振り返ります。


品ぞろえ豊富な直売所に立つ神代さん

風評被害に負けない

までい館は17年3月末の避難指示解除後の開業ですが、しばらくの間は風評被害との戦いでした。「初めの頃の出荷は3、4名の農家さんだけでした。お客さまにはきちんとした基準に基づいた安全・安心な農産物であることをご説明したが、心ない言葉をかけられたこともあり、悔しい思いをしました」と支配人の神代憲男（くましろ）さん。「徐々に出荷者が増え開業2年目には直売所を増床し、今は約100名の生産者に出荷してもらっています」と感慨深く語ります。

までい館の周辺には風の子広場やドッグランもオープン。地場産品の品数が増えてレストランメニューも充実し、来館者は着実に増えました。復興と再生の拠点、村民の生活支援の場という従来の役割はもちろん、季節限定で付加価値を高めた商品の開発やトレンドも追求。限られた場所でしか買えないような商品を取りそろえるなど、知恵と工夫を凝らした品ぞろえを目指しています。

5～9月にかけてみずみずしいアスパラガス、秋は上品な甘さと滑らかな食感の「いいたて雪っ娘（こ）かぼちゃ」などが直売所に並びます。花持ちが良く色彩豊かなアルストロメリアは通年販売。いずれも村の特産でリピーターが多い人気商品です。

神代さんは「地域で頑張っている農家さんをお手伝いするとともに、飯舘村のゲートウェイとして観光発信の場にもしたい。『までい』という言葉を大切にする道の駅でありたい。多くの方に気軽にお立ち寄りいただければ」と前を向きます。



所在地／福島県飯舘村深谷字深谷前12-1
TEL0244-42-1080

海と水門を望む景勝地 普代村の海産物を販売

浜の産直 きらうみ

第2分類の震災伝承施設に登録されている岩手県普代村の「普代水門」。海側の河川敷は園地として整備され、その先は北三陸では珍しい砂浜の海水浴場が広がります。水門を海側から望む絶好の場所にあるのが「浜の産直 きらうみ」。漁業者でもある夫妻が切り盛りし、普代の海産物の消費拡大に努めています。



屋外で海鮮の炭火焼きも楽しめる「浜の産直 きらうみ」

1984年に完成した普代水門は高さ15・5メートル、全長205メートル。東日本大震災では決壊せず、村中心部や住宅地への津波侵入を防ぎ、「奇跡の水門」といわれました。

水門海側の普代川沿いに、復興事業で盛り土などを図り「普代浜園地キラウミ」が整備されました。「浜の産直 きらうみ」は普代川南岸にある平屋建てのコンパクトな施設。設置者は村で、以前は別業態の店が入っていました。合砂（あいさご）時雄さん、ルリ子さん夫妻が「海進丸水産」を立ち上げて施設の指定管理者となり、2018年に海産物の産直をスタート。店のある所には震災前、時雄さんの父が建てた養殖の作業小屋があっただけに、夫妻にとって思い入れの深い場所です。


普代村の特産品が並ぶ店内

店内では村特産の「すき昆布」やワカメをはじめ、煮干し、生ウニ、冷凍のボイルタコ、赤魚などが販売されています。来店者はもちろん、岩手県内陸部の商業施設などに出張出店した際に購入した消費者らが、後に通販で商品を注文するようになり、収益アップにつながっています。「店長」のルリ子さんが主に接客や発送に当たり、漁師の時雄さんは「船長」として海産物の供給を担っています。


店を切り盛りする合砂さん夫妻

海にも震災の影響

時雄さんは元々、一年の大半をイカ釣り漁船に乗り込み、日本沿海を回っていました。しかしイカが不漁となり、昆布やワカメの養殖と定置網など沿岸漁業に軸足を移しました。地球温暖化による海水温上昇や震災後の海底の地形変化などで、漁も影響を受けているそうです。「昆布は海水温25度を超えると腐れてしまう。かといって収穫を早め過ぎても実入りがない。工夫と絶妙のタイミングを見極めるのが大切」と時雄さん。

店では厳選された商品が並んでいます。ルリ子さんは「自分たちが丹精込めて育てたものを、おいしく、さまざまな料理で味わってもらいたい」とレシピを作り、店のウェブサイトにも掲載。店の前で浜焼きを楽しんでもらおうと海鮮バーベキューセットも用意しています。

震災という大きな試練を乗り越えた普代村の水産業を未来へつなげようと、夫妻は「安定した収益を確保できる事業を目指したい」と張り切っています。



所在地／岩手県普代村第7地割字明神29
TEL080-1800-1389

普代村の震災伝承施設

●第3分類（訪問しやすく、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解のしやすさに配慮した施設）●第2分類（公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料または無料の駐車場があるなど、来訪者が訪問しやすい施設）
●第1分類（災害の教訓が理解できるもの）

第2分類
- 故和村幸得元普代村長顕彰碑　普代村第7地割
- 太田名部防潮堤　普代村第8地割
- 普代水門　普代村第14地割

第1分類
- 津波石碑（大海嘯記念）
- 津波石碑（三陸大海嘯 溺死者・諸精霊供養搭）　妙相寺

Topics & Information

第6回伝承ロードアドバイザリー委員会を開催 2024年度の3.11伝承ロード研修会の実施状況などについて

5月12日、第6回伝承ロードアドバイザリー委員会（委員長・佐藤翔輔准教授〈東北大学災害科学国際研究所〉）を開催しました。2024年度に当機構が企画・運営した3.11伝承ロード研修会の実施内容や参加者アンケート結果、震災伝承施設の認知度調査結果、本年度に実施予定の事業について報告し、議論をいただきました。

3.11伝承ロード研修会は震災伝承施設や復興施設などを巡る企業・団体向けに実施しています。震災の教訓だけでなく、被災後の復旧・復興状況にも触れ、インフラの重要性を理解できるほか、災害への「学び」と「備え」を学習し、日常業務やBCPなどでの活用を目的としています。2019年から23年まで72回の研修会を実施し、1382人を震災伝承施設などに案内しました。

24年度は22回、参加者433人を岩手、宮城、福島の震災伝承施設など41施設に案内しました。研修会アンケート調査では満足度が「とても良かった」の回答が88.4%と高評価で、現地でしか学べない、見ることのできない震災の実情や教訓に直接触れられたことが好評のようです。

委員からは「研修会の参加者数を見ると地域別にばらつきがあり、その要因を整理して」「研修会に初めて参加した方の印象に残った点などを把握すれば研修企画の参考になる」「研修会に参加し、自分の行動や考え方にどのような変化が生じたかといった項目をアンケート調査に加えてもらいたい」など、今後の3.11伝承ロード研修会に向けた意見・要望がありました。

また、東北地方整備局から「震災伝承の取り組みについて」、東北運輸局から「東北の観光の現状について」、岩手県から「震災伝承に関するコンテンツ」の紹介がありました。



委員会の開催状況



表紙 被災地を歩く

忘れてはならない「記憶」 津波記憶石第29号（八戸市）

一般社団法人全国優良石材店の会（全優石）＝東京都＝が東日本大震災以来続けている津波記憶石プロジェクト。津波の到達点を示すだけではなく、忘れてはならない「記憶」を残すことが重要で、津波の事実と教訓を示す石碑の設置し、自治体に寄贈する取り組みを続けている。著名な彫刻家やデザイナーが津波の痕跡をアートとして残し、戒めの碑文が刻まれている。

八戸市市川町多賀地区は震災の津波で市内最大の被害を受けた。最大高6.21㍍の津波が押し寄せ、建物被害は218棟に及んだ。八戸市多賀多目的運動場には第2分類の震災伝承施設として「津波記憶石第29号」が設置されている。彫刻家の神戸峰男さんがデザインを担当。幅1.8㍍、奥行き1.7㍍の基礎の上に、高さ2.9㍍の逆L字型の石柱が2本立ち、その間に高さ1.1㍍の女性ブロンズ像が座っている。製作コンセプトは「森羅万象。永遠のいのちの力に祈りをこめて」。若い女性が空を見上げる姿は、自然災害の苦難に負けず、立ち向かう命を表現している。

運動場には管理棟を兼ねた高さ約20㍍の津波避難施設を設置。コミュニティセンターとして機能する4階の集会室が避難スペースとなり、災害時には80人を収容できるという。今後、津波の発生が予測される場合、素早い避難につなげ、人的被害を抑える場にする。

同じ運動場内に立つ津波記憶石第29号の碑文には、こう書かれている。「最も尊いもの それは一つしかない命」



所在地／青森県八戸市市川町後55-1
八戸市多賀多目的運動場内

伝承ロード縁 2025年6月11日発行
発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構　編集・制作／株式会社クリエイティヴエーシー

無料

記事を見ての感想、取り上げてほしい話題など、ご意見をお寄せください。 info@311densho.or.jp FAX022-393-4271